
Nightmare:the blood sucker

水月透花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N i g h t m a r e : t h e b l o o d s u c k e r

【Nコード】

N 2 9 8 5 B

【作者名】

水月透花

【あらすじ】

無明の闇の水底で永久に眠り続けるべき有り得ざる物が光の下へと引きずり出されたかのような叫びが、木霊する。その声を上げたのは一人の少女だった。

第一話：夜の薔薇

無明の闇の水底で永久に眠り続けるべき有り得ざる物が光の下へと引きずり出されたかのような叫びが、木霊する。

その声を上げたのは一人の少女だった。

あと、あと少しだ。

男はそう、自分自身へと何度も何度も反復していた。

教会からの、最優先指令のターゲット。偉大なる神の創りたもうた人間であることをやめ、神の国への道に背いて生に縋りつき死にながら生けるおぞましい化け物。その中でも、二千を超える刻を閲しなお、滅ぶことのない最強と謳われる少女。偶然に手負いで見つけたそれを、この手で——灰は灰に、塵は塵に、死体は死体へと還さねばならない。

今撃ち出された聖銀の矢はその眼窩を射抜き、脳髓を貫いて頭蓋骨を穿った。ぽっかりと空虚な姿を晒すその穴からは崩れた脳が流れ出る。

まだ、まだ。

油断をすればその瞬間に自らの首が飛ぶ。

片足は千切れかけ、今自分が放った矢で脳すら損傷してもなおその予感が頭を離れない。

男はその感覚に今にも情けなく叫び声を上げて逃げ出したくなりながらも、響き渡る叫びに震える腕を少女へと向けた。

狙いを定めたとき、少女の紅い瞳が男を見据え、引き金が引かれようと言ったとき、数人の男の声が聞こえた。

どうする——？

少女のあげた叫びを聞きつけてきたのだろっ、数人の男の気配。刹那の迷いが、全てを決めた。

少女はすぐに背を向け、気配の方へと向かう。ヒトであれば間違

いなく即死する怪我をいくつも受けながら、予想以上の速さで疾走したそれに狙いを定められない。男はあわてて走り出すがしかし、そのときには少女の姿は視界から消えていた。

バイト帰りの道。

いつものように公園を抜けようとして、この世の物ではないような叫びに足を止めた。全身が総毛立つ。

背後から聞こえたそれに、振り向いて吸い込まれるような闇の中に目をこらす。生暖かい臓腑のように湿った夏の夜、微かに漂う納骨堂のような腐臭。声の聞こえた方へと歩き出す。

月明かりと星空に照らされる砂利道を抜け、一つの角を曲がると、数メートル離れた外灯の下に二、三人の集まりが居た。おそらく、あの声を聞きつけてきたのだろう。

と、草を踏み分ける足音が聞こえる。それはかなり速く走っているらしく、すぐに音の主が薄暗い外灯の下にその姿を浮かび上げさせた。

その刹那、銀線が閃き、それは正確に首をなで、宙に舞う。

仄暗い大気に紅い雨が降った。次いで、ぐちゃり、と濡れた何かが落ちる音。

夜空のベルベットにも似た、艶やかな黒髪。フリルであしらわれた、闇を醸成し糸として織りなしたような黒のドレスに映える、白磁の肌。そして何よりも印象的な、ぽっかりと空いた黒い眼窩、その対称の血のように紅い目と、唇。

紅い朱い雨をその身に浴びながら恍惚の表情を浮かべる、その人形めいた精巧な美しさに俺は、言葉を失った。

その少女の顔がこちらに向けられ——あどけない、微笑みを向けられる。

袖で顔にかかった血をぬぐうと、その体が一瞬にして目の前にあり、右手が振り上げられていた。時間の流れが鈍化し、普段なら捉えられないであろうその動きがひどく、ゆっくりと見えた。その手

に握られた、巨大な、斧。

少女が右足を踏み込み、その右手に振り下ろそうというとき、しかし逆に力を失い失速した。

刹那、少女の瞳が紅く、光った気がした。

ふらり、と少女の体が揺れて、俺の腕の中へとその軽い体が倒れかかる。

天上には銀の月、四方には青い闇。弱々しい外灯の光は闇を払いのけきれず、その領域を夜へと蝕まれている。それに照らし出され、わだかまる影、人であったモノ。そして、腕に中で静かに眠る黒衣の少女。

時間が停まったように、大気が凍りついたように。
静寂の中で、立ちつくしていた。

吸血の姫、千の影（前）

部屋の電気をつけるという、ただそれだけの動作にかなりの注意を要する。背負った少女の体からは完全に力が抜けており、だらりとした手足はしがみつこうとはしないので落とさないために。

一旦、ベッドに腰をかけ、それからゆっくりと少女を寝かせる。

「ん……」

少女が小さく身じろぎし、薄く目を開ける。その目はまだどこか遠くを見るようにぼんやりと焦点を合わせようとはしない。

「きみ、は……」

焦点が俺にあわされ、無表情のまま黒曜石のような瞳がじつとこちらを見つめる。

新雪のように白い肌に妙に浮いた、血のように紅い唇から言葉が紡がれる。

「……な、お……」

「な——きみの、名前？」

そう問いかけたときには、少女は再び眠りの淵へと戻っていた。

白と、緋の布が夜空にはためく。

白木の弓に被串を握った右手で矢をつがえ、引き絞る。

ビルの屋上から屋上を跳び渡りながら、しかしその狙いはぴたりと制止している。何ら感情を表さない少女の横顔は、精巧な日本人形を連想させる。結い上げられた髪が風にたなびき、その風が通った後の一瞬の無風、その隙を逃さずに放たれた矢は狙い違わず前方を同じように跳び渡っていた影へと突きたった。

倒れ伏したその影の横に一足跳びで降り立つ。右手の被串を矢筒へといれ一振りの白をおびた両刃の剣を取り出した。刀と鐔、柄は一体で、菖蒲に似た刀身をしている。

振り下ろされ、影を断つ——と、影は塵と化して風にながれた。

瞼を閉じ、瞑想するように静止する。

青い闇の中、白の小袖に緋色の袴。握られた白い刀身が月明かりを反射して銀に煌めいた。

玄関の扉を開けると、星明かりにのみ照らされた狭いワンルूमの奥で、黒曜石の瞳が煌めいた。

部屋へと上がり、電灯を点ける。狭いフローリングの床の三分の一ほどを占有するベッドの上に、わだかまる闇より黒い黒衣の少女。「目、醒めたのか」

「こくん、と頷く。」

その動作はどこかきこちなく、少女の人形めいた雰囲気をもっと強めていた。

「君は……何なんだ？」

昨日聞けなかった問いを、口にする。少女はその紅く艶を帯びたなめかましい唇を開いた。

「Vampire——ヴァンピール。この国では、吸血鬼とか呼ばれてるモノ」

沈黙。

「驚かないの？」

「大体、予想はしてた」

すう、と少女は紅い眼を細める。

「貴方、名は？」

「叢雲、光也」

「ムラクモ……そうか。この国最強と言われる対魔師の一族。納得」

「よく、知ってるな」

「かなり有名。今じゃ落ちぶれたみたいだけど」

少女の蔑むような目付き。

「もう何千年も前に宗家の草薙家に実権握られて、形式だけ残ってるんだよ」

そ、とだけ少女は興味なさそうに答えると、再び沈黙が部屋を支

配した。しかし少女はじつとこちらから目を離そうとしない。普通なら男女がこんな風に一部屋で見つめ合っていたら何かとあるのだろうが、そんな雰囲気は微塵もなく、またドライな感情しか浮かんでこない。それは彼女が人でないからなどでなく、ただあまりに美しすぎるからだろう。完璧に均整のとれた顔だち、艶やかなストリート黒髪。それらが少女を非現実的な、肉を持たない身であるかのように感じさせていた。

「シャワー、浴びたい」

少女の一言で我へと帰る。

「あ、ああ、どうぞ」

「ん」

そう言つて寝転んだまま細い右腕をこちらへ突き出す。左はまだ動かないらしい。

その手を取つて起き上がらせてやるが、しかしまだ少女は手を離そうとはしない。

「なんだ？」

「連れてつて、浴びさせて。私、まだ立てない」

「……は？」

「私を、お風呂まで連れて行つて、シャワーを浴びさせて」
呆れる。

「お前、羞恥心とか、ないのか？」

「見られて恥ずかしいような体、してない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2985b/>

Nightmare:the blood sucker

2010年10月9日03時27分発行